

## ふくやま美術館

19 世紀フランスにおける海の表象についての研究—クールベを中心として

調査研究期間：2019 年 9 月 1 日（日）～2020 年 3 月 31 日（火）



島根県立美術館調査のようす



横浜美術館調査のようす



フランス調査のようす（エトルタ）



フランス調査のようす（オルセー美術館）

### 【調査研究の内容・目的】

- 19 世紀フランスにおける海の表象は、クロード・モネ《印象、日の出》といった印象派の作品によって日本人にとってもなじみ深いものである。一方で、そのままの海を美的な鑑賞の対象として捉える感性がこの時代に芽生え始めたことは、ほとんど認識されていない。本調査研究では、物語性を排除して海の情景を切り取った初めての画家と言われるギュスターヴ・クールベの絵画を中心として海の表象の変化、受容を探ることにより、19 世紀の海と人との関係を明らかにする。それにより、現代まで続く海と人間との関係を考え直すきっかけとする。
- 19 世紀フランスを中心とした海を描いた国内所蔵の作品を調査し、それを基に海の表象を感性的に捉える展覧会を開催する。海的美しさを再発見するとともに文化史的な学びを立体的に体感できる展示を目指す。

# 1. 調査研究内容の詳細

## 【調査研究代表者】

- 鈴木一生（ふくやま美術館 学芸員）

## 【実施計画】

- 1カ年計画 1年目

## 【主な調査研究対象など】

- 成城大学図書館
- 国立西洋美術館研究資料センター
- 横浜美術館
- 島根県立美術館
- ルーヴル美術館
- ファール美術館、同館資料室
- ノルマンディの海岸
- オルセー美術館、同館資料室
- フランス国立図書館
- 姫路市立美術館
- 東京都写真美術館
- ギャルリ・ミレー

## 1. 文献調査 2019年10月10日、10月11日

成城大学図書館（東京都世田谷区）、国立西洋美術館研究資料センター（東京都台東区）

成城大学図書館では先行研究資料の収集・調査を、国立西洋美術館研究資料センターでは同館所蔵のクールベ《波》（1870年頃）、ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴィルの浜》（1867年）の作品ファイル（所蔵作品の資料をまとめたもの）の閲覧調査、及び参考研究資料の収集・調査を行った。作品ファイルからは、主に作品の来歴や展覧会歴など基本的な情報を知ることができた。先行研究は、現在読み進めている最中であるが、19世紀の海を描いた作品、特にクールベの作品に関して多様な論点を知ることができる。例えば、Petra ten Doesschate Chu, “Courbet et la commercialization de son oeuvre”, in J. Zutter (ed.), *Courbet-Artiste et promoteur de son oeuvre*, Paris, 1998, pp. 53-81.においては、クールベの作品における宣伝の手法、またその販売（どのような販路でどのような人々に売っていたのか）が具体的に明らかにされている。彼の海景画に関しては、画商を通さない直接の販売が顕著であり、自然に休息と癒しを求めた都会のブルジョワたちが「カンヴァスの上にまさに自然が刻まれている」クールベの作品を好み、買い求めたと論じている。このことは、19世紀半ばの都会生活者の間の海水浴リゾートの流行と密接に関係している。しかし、クールベの作品が他の海景画とどのように異なり、なぜ特に需要の高いものであったかは、さらなる調査研究が必要とされる。作品の分析、同時代の受容の調査のさらなる研究を行う。これらにより明らかにされたことにより、19世紀フランスにおける海に対する考え方の一端が明らかになるとともに、現代の我々が海を文化史的により深く知る学びが見込める。



ギュスターヴ・クールベ 《海景》 個人蔵



アンリエット・ギュダン 《荒波を行く》 個人蔵

## 2. 聞き取り調査 2019年10月11日 オークション会社、画廊

オークション会社、画廊の直接の聞き取り、調査協力により、クールベ《海景》、アンリエット・ギュダン《荒波を行く》の2点が国内に所蔵されていることが明らかになった。

前者は、ノルマンディ地方の海岸の干潮時の様子を描いたものである。前景に海岸の地形がむき出しになっており、後景には穏やかな海の姿を確認することができる。画家は同構図の作品を複数描いているが、荒れた海の波にクローズアップした絵画や崖に打ち付ける波の様子を描いたものが多い中、国内では極めて稀有な作品であるといえる。これによって、多様な海の表情を「鑑賞する」という態度があったことを学ぶことができる。

後者の作家、アンリエット・ギュダンは、19世紀半ばに海景画家として著名であったテオドール・ギュダンの娘であり、弟子である。テオドール・ギュダンは、海戦の情景を劇的に描く画家であり、彼女もそれを引き継いでいる。この絵画ジャンルは、18世紀に隆盛を誇ったものであり、19世紀になっても、ロマン主義的な劇的な効果を用いながら生きながらえていた。本作も、荒れる海の上の船という典型的な構図であり、印象派たちが描く私的な海岸のリゾート風景との比較において、海の表象の変化を窺うことができる。



左：ギュスターヴ・クールベ《海岸の竜巻（エトルタ）》1870年、横浜美術館蔵（坂田武雄氏寄贈）  
右：左図部分

### 3. 作品調査 2019年10月14日

横浜美術館（神奈川県横浜市）

クールベ《海岸の竜巻（エトルタ）》（1870年）を閲覧調査した。クールベは、1860年代半ばより頻繁にノルマンディ地方を訪れ、海とともに刻々と表情を変える気象現象に関心を抱いている。特に1869年の夏に訪れたノルマンディ地方の漁村エトルタでは、嵐の海の激しさに魅了されて多数の絵画を描いている。《波》（島根県立美術館、調査4参照）のように海にクローズアップした作品が多い中、本作は崖に打ち付けられる波に焦点が当てられている。空には黒い厚い雲がかかり、そこから激しい雨が海に降り注いでいる。ニューヨークのメトロポリタン美術館、ディジョン美術館などに同構図の作品が所蔵されているが、国内所蔵では唯一のものであり、これらの作品よりもわずかに大きい。実見調査により、岸に打ち付けられる波の泡の部分など、カンヴァス地が見えるほど薄塗で巧みに表現されていることがわかった。この作品を通して、時に我々に牙を向ける、海の崇高さを感じる海の学びが見込める。



「黄昏の絵画たち—近代絵画に描かれた夕日・夕景—」展 展示風景



左：ギュスターヴ・クールベ《波》1869年、島根県立美術館蔵

右：クロード・モネ《アバルの門》島根県立美術館蔵

#### 4. 作品調査 2019年10月24日

島根県立美術館（島根県松江市）

展覧会「黄昏の絵画たち—近代絵画に描かれた夕日・夕景—」展を閲覧調査した。本展は、西洋・日本近代絵画における夕日の情景の表現の変化を追ったもので、夕日を伴った海の情景を描いた絵画が多数出品されていた。特にクールベ《波、夕暮れにうねる海》（1869年、ヤマザキマザック美術館蔵）、ウジェーヌ・ブーダン《プレスト・停泊地》（1872年、愛媛県美術館蔵）、クロード・モネ《サン＝タンドレスの海岸》（1864年、栃木県立美術館蔵）は、本調査研究と重なり合うものであり、重点的な調査を行った。いずれも「夕暮れ」という気象的な関心をもって描かれたものであるが、波のみを切り取ったクールベと海岸と停泊船とともに海を描いたブーダンとモネとの関心は大きく異なる。ブーダンとモネが水面に映る光などに関心を抱いているのに対し、クールベは海の波という現象自体に注目しているように思われる。これらは、風景画史的な変化を知るとともに、海のどのような姿に美しさを見出すかという多様性を知る学びにつながる。

島根県立美術館は、宍道湖に面した場所に建設されており、ガラス張りの入り口ホールからは、湖に沈む夕日を望むことができる。本展は、その立地から見える風景と展示された作品がリンクするものであり、2次元の過去の作品を通して目の前の実際の風景を新たな目で賛美するという工夫がなされていた。本調査研究において、海の絵画作品を通して現在の目の前の海の風景をどのように大切に作る学びを生み出すかのひとつの参考例となった。

また島根県立美術館所蔵のクールベ《波》（1869年）、モネ《アバルの門》を閲覧調査した。後者のモネの作品は、ノルマンディの漁村エトルタにある「アヴァルの門」と呼ばれる自然の風雨と波にさらされてできた独特のアーチ状の形をした断崖である。この情景と同じ場所をクールベもまた描いており（新潟県立近代美術館蔵）、各画家の特徴の違いを知るとともに、海の力が創り出す自然の風景を絵画を通して知ることができる。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。

## 5 作品・資料・画家視点地調査（フランス） 2019年12月1日～12月12日



左：ジョゼフ・ヴェルネ《夜、月の明りに照らされた港》1771年、ルーヴル美術館蔵  
右：ルーヴル美術館、オランダ海景画展時のようす



左：アシル＝エトナ・ミシャロン《サレルノ（イタリア）、海の眺め》1820年、ルーヴル美術館蔵  
右：カミーユ・コロー《ル・アーヴル、崖の上からの眺め》1830年頃、ルーヴル美術館蔵

### 作品調査

ルーヴル美術館（パリ） 2019年12月2日

18世紀から19世紀にかけてのフランス海景画を主に閲覧調査した。本美術館は、体系的に作品が所蔵されており、海の表象の変化を知る上で多くの示唆を与えてくれた。例えば、ジョゼフ・ヴェルネ《夜、月の明りに照らされた港》においては、17世紀ローマで活躍した画家クロード・ロランの作品の古典的な構図、モチーフを引き継ぎながらも、同時代の堂々とした帆船を描いている。これらは、オランダ海港都市を称揚する絵画たちの影響を想起させる。実際、ヴェルネは、1753年にフランス国家から注文を受け、10年以上をかけて15点の各地のフランスの港の賑わいを描いている。ここからは、18世紀において、フランスの海の表象がどのような意味を持っていたかということを知ることができる。

一方で、19世紀初頭の風景画家であるアシル＝エトナ・ミシャロン《サレルノ（イタリア）、海の眺め》やカミーユ・コロー《ル・アーヴル、崖の上からの眺め》においては、理想化されていない現実の海が純粋に描かれている。この表現の変化には、18世紀末より、アカデミックな風景教育にも非公式に導入されていく戸外での油彩制作が大きく影響している。ただ彼らにとって、純粋に目の前の海を捉えた絵画は、あくまで習作であり、完成作においては何らかの意味が込められたものが求められた。この点に関しては、本研究成果のひとつである「クールベと海」展図録掲載予定の報告者の論考において詳述する予定である。これにより、海と人間とのかかわり、海への人間の美的判断の変化をよりよく知る海の学びを生み出す。



フェアブル美術館資料室調査の様子



左：ギュスターヴ・クールベ《パラヴァスの海辺》1854年、フェアブル美術館蔵

右：実際のパラヴァスの海辺

### 作品調査・資料調査

フェアブル美術館（モンペリエ） 2019年12月3日

資料室にて、クールベが初めて海を集中的に描いたパラヴァスの浜辺の絵画の代表作、《パラヴァスの海辺》に関する資料を閲覧調査した。貸し出しのやり取りの書類も多く、本作が、世界中の多くの美術館に貸し出され（主にヨーロッパ、アメリカ）、クールベの海のイメージを流布していることがわかる。その他、本作に関わる二次資料を閲覧、複写を収集した。これは、今後、読み込みの上、クールベの海の表象を紹介するのに活用される。

また展示室にて、作品を実見・閲覧した。本作には、南仏の前に立つ画家自身が描かれている。海と画家との出会いを描く絵画として、同美術館が所蔵する画家とパトロンブリュイヤスの出会いを描いた《出会い（こんにちは、クールベさん）》と構造的に類似した、記念碑的作品と考えられる。画家は、砂浜の岩の上に直立し、帽子を脱ぎ、仰々しく海に挨拶をしている。スイス国境近く、フランシュ＝コンテ地方出身のクールベにとって、海は決して身近な存在ではなかった。広がる地平線の姿は、画家が初めて海を見た際に、両親に「地平線のない海、これは谷の住民には奇妙なものです」と書き送っているように、驚くべきものであった。本作は、時に伝記作家たちによって、海に負けない自分の名声の高さを叫ぶ画家のうぬぼれが指摘されるが、一方で世界へとつながる、大きく広がる海への画家の純粋な驚きや敬意の挨拶とも受け取ることができる。

### 画家の視点場調査

パラヴァス・レ・フロ 2019年12月3日

上記作品の画題となったパラヴァスの海を実見・調査した。パラヴァスの浜辺は、モンペリエの街から10数キロ離れた位置にあり、ペロール池と海に囲まれた独特の景観を望むことができる。天候が変わりやすく、時に激しい表情を見せるノルマンディの海岸とは異なり、落ち着いた、穏やかな様相を呈している。クールベが描いたパラヴァスの海もまた、穏やかな水平線が広がる作品が多い。実地調査により、クールベが海そのものの特徴を巧みに捉えていることが判明した。このことは、日本においてクールベ作品を展示する際にも、画家の表現のみならず、地中海、英仏海峡の表情の違いを作品を通して鑑賞者が疑似体験することができる。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はできません。



左：ル・アーヴルの港

右：(参考) クロード・モネ《印象、日の出》1872年、パリ、マルモッタン美術館蔵

### 画家の視点場調査

ル・アーヴル 2019年12月5日

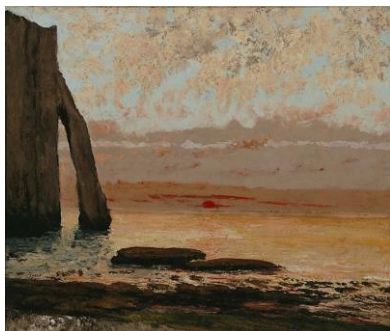
クロード・モネが、印象派の名前の由来ともなる《印象、日の出》を描いた場所であり、ポール・ユエやウジェーヌ・ブーダンなど、多くの19世紀フランス画家によって描かれたル・アーヴルの港を視察した。19世紀半ばから後半にかけ、ル・アーヴルは、フランスが誇る近代的な港であり、多くの大型船が行き来していた。残念ながら、第二次世界大戦で多くの被害を受け、街には19世紀の趣はない。しかしながら、港には、埠頭などに19世紀に整備された名残があり、あちこちには、画家の視点場となった場所と絵画の紹介をする看板も見ることができた。これらは、著名な絵画を通して、実際の港を身近にさせようとする取り組みである。本調査においても、絵画とともに実際に調査した景観を紹介することによって、実際の海を美的感性をもって見つめる学びにつながる。



エトルタの断崖、通称「アヴァルの門」



クールベの視点場から見た断崖



左：(参考) ギュスターヴ・クールベ《エトルタ海岸、夕日》1869年、新潟県立近代美術館

右：(参考) クロード・モネ《アバルの門》島根県立美術館蔵





エトルタの浜辺



エトルタの波

## 画家の視点場調査

エトルタ 2019年12月6日

クールベが1870年のサロンに出品した《エトルタの断崖》、《嵐の海、または波》（オルセー美術館）、そして当館所蔵の《波》（1869年）など、1869年滞在時に多くの海景画を描いた地であるエトルタを調査。この地は、モネやブーダンなど他の多くの画家によっても描かれている。その中でも、特に独特の形をした通称「アヴァルの門」と呼ばれる岸壁は、芸術家の興味を強く惹き、様々に表現されている。上記中段の作品は、本研究をもと企画される展覧会に出品予定であり、海が創り出した自然の興味深い岩の芸術を楽しむのにも寄与するであろう。

クールベは、サロン出品作である《エトルタの断崖》（12月8日オルセー美術館調査画像参照）において、この岸壁から少し離れた場所から、俯瞰するようにエトルタの海岸を描いている。実際にクールベの絵画と同じ角度の位置に立つと、岸壁の頂上の平面の部分が絵画のように覗くことはできない（上記上段右手写真参照）。この操作には、画家の何らかの意図があったと考えられる。このことは、下記に記したオルセー美術館による作品の調査によって、よりはっきりとした仮説として浮き上がることになる。



ブーダン作品展示風景



ウジェーヌ・ブーダン 《エトルタの断崖》

## 作品調査

アンドレ・マルロー美術館（ル・アーヴル） 2020年12月6日

美術館を視察。ブーダン、クールベ、モネなどの海景画を閲覧する。本美術館は、海辺に立っており、窓からは海の風景を望むことができ、展示された海景画とともに楽しめるような工夫がなされている。特に多くの所蔵を抱えるブーダンの海の習作については、1点1点を鑑賞するのではなく、その全体像として海の様々なイメージを受けられるような展示がなされていた。これらは、本研究をもとにした展示をする際に参考になると考えられる。



オンフルールの港



オンフルールの河口



サン＝シメオン農場



サン＝シメオン農場付近から見た河口



参考：コロー《オンフルールのトゥータン農場》  
1845年、アーティゾン美術館

## 実地調査

オンフルール 2019年12月7日

ブーダンの生まれ故郷であり、クールベが1866年に訪れたオンフルールを実地調査した。オンフルールは、ル・アーヴルから25キロほど離れた、セーヌ川河口、英仏海峡につながる港である。中世から18世紀末まで海上貿易によって栄え、19世紀には、港の入り口部分が浅く、大型船が寄港できないことから、近代的な港ル・アーヴルにその役割を受け渡すことになった。19世紀からは、近世の趣を残す港の情景に惹かれ、多くの観光客が訪れる場となった。ピトレスクな港の情景は、多数の芸術家によっても描かれている。この実際の場とともに、描かれた作品を紹介することにより、海と人によって育まれる歴史的文化を理解する海の学びにつながる。

またオンフルールとトルーヴィルの間にあるサン＝シメオン農場を視察。この地は、1825年から1870年の間に多くの芸術家の交流の場となった宿屋である。コローやドービニー、ヨンキント、モネなどがここに滞在し、この場所を描いている。ブーダンを訪ねたクールベもまたここを訪れた可能性が高い。現在は、ホテルとなっており、瓦葺屋根のこの家は、ホテルのレストランとして使用されている。



クールベ《嵐の海、または波》(左)と《エトルタの断崖》(右)の展示風景



《エトルタの断崖》部分1



《エトルタの断崖》部分2

## 作品調査

オルセー美術館（パリ） 2019年12月8日

1870年に出品された作品であり、クールベの「海の風景画」の代表作である《嵐の海、または波》、《エトルタの断崖》を実見調査した。しばしばクールベの作品は、他の印象派の浜辺の風景と比べ、人の存在が不在であると指摘されるが、実見の詳細な調査により、《エトルタの断崖》崖の上に人影（部分1）があることが判明した。これは、現地調査により明らかになった、岸壁の頂上部分の見晴らしの平面を鑑賞者に見えるように広く取っている操作の意図ともつながるものである。また浜辺に3艘の小舟を描く（部分2）など、明らかにクールベは浜辺に生きる人の存在を暗示している。先行研究において、この小舟は、蒸気船が主流の19世紀において、時代遅れの貧しい漁師の船であることが指摘されている。クールベは、ただ単に海辺の風景を描いたというよりも、そこに生きる人々の生活も含めた、漁村の浜辺を描いていることが予想される。それは、そういった田舎の情景を物珍しく絵になる風景として捉える、都会から見た海辺の眼差しが介在しているように思われる。これらの作品が、同時代においてどのように受け入れられていたかはさらなる調査が必要とされる。これは、ひとと海の関係を知るという深い海の学びにつながる。



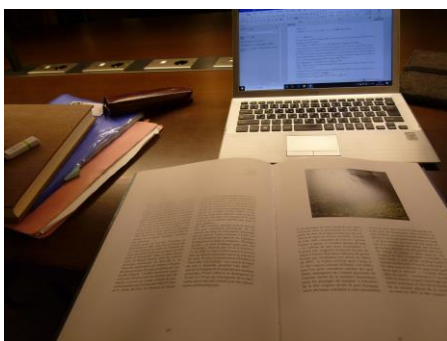
オルセー美術館資料室、調査のようす

### 資料調査

オルセー美術館（パリ） 2019年12月9日

クールベ《エトルタの断崖》、《嵐の海、または波》に関する資料、ノルマンディの海景画に関する資料を閲覧・調査した。料から、以下の文献が要検討のことが判明した。Exh. Cat., *Courbet- A dream of modern art*, Frankfurt, Achim kunsthille Frankfurt, 2010-2011; Cat. exp., *Un siècle de bords de mer dans l'estuaire de la Seine 1830-1930*, Honfleur, Musée Engène Boudin, 2013. 前者は、クールベの海の風景画を、そのままの情景として捉えるのではなく、画家の政治的意図が表れたものとして捉えたクラウド・ハーディング監修の展覧会である。ただ海を捉えるのではなく、そこにある画家の意志、作為を明らかにしようとするハーディングの研究は、その論理に疑問の余地はあるが、海と人との関係、海と近代の自我との関係を考える上でも重要だと考えられる。

また資料から、国内所蔵の作品であるクールベ《波、夕暮れにうねる海》（ヤマザキマザック美術館）のオークション出品時の記載を発見した。サザビーズ 1987年5月21日に出品されている。これは、国内の海の風景画の受容を考える上で役立つと考えられる。本研究の枠を超えるものであるが、国内のクールベの海の風景画の受容を明らかにすることは、日本における海に対する捉え方の変遷を明らかにする海の学びにつながる。



フランス国立図書館、調査のようす

### 資料調査

フランス国立図書館（パリ） 2019年12月10日

1次資料を閲覧予定であったが、閉架資料閲覧配架がストのため停止していたため、開架の2次資料を閲覧・調査した。2019年春にフランスのリシャル・アナクレオン近代美術館とグランヴィル美術歴史博物館にて「ギュスターヴ・クールベ、海の風景画」展が開催している資料を見つける。図録 Cat. exp., *Gustave Courbet, Paysage de Mer*, musée d'art moderne Richard Anacréon et le Musée d'art et d'histoire de Grandville, 2019. を調査した。これらを参照にし、19世紀フランスの海景画を通して、海の美しさを再認識する海の学びにつながる2021年度の企画展を構成する。



クールベ《波》1870年頃、姫路市立美術館蔵（国富奎三氏寄贈）

## 6 作品調査 2020年1月21日

### 姫路市立美術館

クールベ《波》を熟覧・調査を行った。前景の岩の形から、以前に調査した島根県立美術館所蔵《波》と愛媛県美術館所蔵《波》と同じ場所を描いたものと思われる。しかし、より波にクローズアップしたものとなっている。ただ波だけをパレット・ナイフを巧みに用いて、クローズアップで迫真的に描かれた作品には、海の近づきがたい力強さを感じる。それは、ロマン主義的な畏怖の美学を引き継ぎながらも、一切の物語性を廃止した近代的なものであり、自然の独立を想起させるものとなっている。本研究・調査において、クールベの複数のバージョンの「波」を調査したが、前景や波の上に小舟を描いたものに、作品を売るための商業的意図や同時代の漁師の生活を示唆するものであることが先行研究にて指摘されている。一方で、本作はより純粋に海のみを切り取ったもので、クールベの意図を知る上でも、現代日本において単純に鑑賞者に海の力強さを知っていただくにも有益だと考えられる。

本調査において、海外から本作を30数年前に購入した人物であり、姫路市立美術館に本作を寄贈した国富奎三氏に話を伺うことができた。なぜ本作を購入することにしたかという質問に対して、国富氏は「個人的にはより政治的なメッセージが濃厚な《石割り》といったクールベ作品を好み、購入しようと考えたが、何も知識を持たない人々に見せる際に、より直接的にクールベの魅力が伝わり、純粋に海の迫力ある描写に感銘を受けることができる本作を見て、購入を決めた」と答えた。このことは、現代でも言えることであり、本作に見られるクールベの海の表現は、鑑賞者に直接的に海の魅力を伝えるものであり、本調査を基にした展示が海の魅力を伝えるであろうことが予想される。



左：ギュスターヴ・ル・グレイ《ボルドー港》1850-60年、東京都写真美術館蔵



右：ギュスターヴ・ル・グレイ《海景》1856年頃、東京都写真美術館蔵

## 7 作品調査 2020年2月12日

東京都写真美術館

ギュスターヴ・ル・グレイ《海景》、《ボルドーの港》、《フォンテーヌブローの森のブナの木》の全3点を熟覧・調査を行った。この3点の作品は、19世紀の写真と風景画の関係を考える上で重要な作品である。《フォンテーヌブローの森のブナの木》(1856年頃)は、モチーフ、構図の取り方、前景とぼやける後景との関係など、写真が絵画に影響を与えたというか、むしろ当時の戸外油彩習作の実践が写真に影響を与えていたことが窺える。また《ボルドーの港》もまた、18世紀以来続く賑わう港の情景という、時に国の繁栄を示すためにプロバガンダ的に制作された絵画作品を引き継ぐものであると考えられる。実見での調査により、本作は、遠景も含めた隅々までがはっきりと写るよう撮影されていることが判明した。港を表象した作品にとって、船の微細な表現、画面ぎりぎりまで船がびっしりとあることが重要であったのであろう。

一方で、《海景》は、写真というメディアによって写された新たな海の表現といえる。ル・グレイは、当時撮影不可能であった海の撮影を、海と空を別々に露光した湿板を組み合わせ、動きの激しい波の姿を初めて写真で捉えた。実見からは、モンタージュの違和感は一切感じることができず、当時の人々がこの表現に、大きく驚かされた様子が想像できる。実際、本調査研究の中心モチーフである1860年代後半に描かれたクールベの一連の波の作品は、ル・グレイの海景の写真に影響を受けていることが先行研究にて指摘されている。また本作は、台紙に貼られており(東京都写真美術館に収蔵された時点でこの形であったという)、一般に広く流通していたことが予想される。

これら写真と絵画の海の表現の関係、また本作によってなされた海のイメージの流布は、19世紀フランスの海の表象を知る上で欠かせないものであり、海と人との文化を知る上で示唆に富んでいる。



左：クールベ《海岸風景》1866年、ギャリ・ミレー蔵

右：クールベ《海》1875年頃、ギャリ・ミレー蔵

## 8 作品調査 2020年2月19日

ギャリ・ミレー

クールベ《海岸風景》(1866年)、《海》(1875年)の熟覧、調査を行った。本作2点は、国内のクールベ作品にはあまり例のない、静かな海を表現したものである。《海岸風景》は、干潟の海の様子と制作年代からオンフルール近郊で描かれたものだと考えられる。粘土質の砂浜と干潟に現れる岩の形態など、クールベは、見事にその土地の海岸の特徴を捉えている。また本作は、海岸の海と空の色彩を微細に描いたものであり、単調な海岸線でありながら、海の美しさを感じることができる。《海》は、画家がスイスに亡命した後に描かれたものであり、記憶や過去の作品をもとに海景を描いたものである。しかしながら、刻一刻と変わる天候の下の海を描いており、海景の見せる多様性を表現している。これらの作品は、鑑賞者に多様な海へ関心を向けさせる海の学びを促進する展覧会に活用される予定である。

## 2. 本調査研究成果を基に計画・実施可能な 「海の学び」に繋がる博物館活動案

- 博物館活動の形態：19世紀フランスの海の表象をテーマにした企画展  
「クールベと海」展
- 実施時期：2020年12月19日—2021年2月21日
- 実施場所：ふくやま美術館企画展示室

### 【実施内容】

本展覧会は、19世紀半ばにおいて、それ以前にはない「あるがまま」の現実を描いた写実主義の画家として知られるギュスターヴ・クールベが描いた海の風景画を中心として、18世紀から19世紀のフランスにおける海の表象の変化を展覧しようとするものである。西欧において19世紀は、海水浴場が各地につくられるなど海が人々にとってより身近になった時代である。この時代の海の表象は、それ以前の崇高やピクチャレスクの対象として象徴的に海を捉えたものとは異なり、そのままの海を美的な光景＝スペクタクルとして捉えている。本展では、クールベの海景画のみならず、畏怖を呼び起こすものとして描かれた18世紀の海景画やレジャーの場所そのものとして描いている印象主義画家たちの絵画、また同時代の水着や船の模型など多角的に19世紀フランスの海を取り囲む状況を展覧したいと考えている。

来館者に各画家の魅力を伝えるのみならず、海を鑑賞の対象として捉えるということがどういった状況で起こったのか、人々が海をどのように「美しいもの」として表現してきたのかを視覚的に体感することにより、海と人との関係を考え直し、次世代に海の「美しさ」を引き継ぐ大切さを育む「海の学び」を促す。

### 【他の博物館・機関や地域社会との連携や取り組み内容】

■山梨県立美術館にて、2020年9月11日～11月33日に本展覧会を巡回。

■パナソニック汐留美術館にて、2021年4月10日～6月13日に本展覧会を巡回。

### 【特に学校教育との連携について】

■弊館事業「10歳の君へ ようこそ美術館プロジェクト」の一環として、市内の小学4年生の生徒を美術館に招待（年度内の全特別展の中で割り振るため、全学校ではない）。展覧会の解説を行うとともに、海と人との関りを考えるワークシートを配布予定。

## 【事業全体のまとめ】

本調査研究により、クールベがそれぞれの海の特徴を巧みに捉えていることが判明した。一見、同じ場所を描いているように思えた海の作品においても、エトルタ、オンフルール、パラヴァス、各土地の海岸をそれぞれ異なる表情で画家は捉えている。これは、海の個性を知るうえで重要である。また、同様の作品のヴァージョンの違いは、そこに漁師の生活を想起させたり、あるいは単純に波の姿に集中させるのか、画家の意図性とともに受容者の希望が反映されている。このことは、人々がどのように海を捉えていたかを知る一端になりうると考えられる。

本調査研究により作成された国内所蔵の19世紀フランスの海景画リストは、2020年度の展覧会にそのまま活用される。本事業で収集された資料を基に、さらに研究を進めていくことによって、海と人との文化を知るための、有益な展覧会が開催できると考えられる。

## 主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 国立西洋美術館	資料調査協力
2. 横浜美術館	作品調査協力
3. 島根県立美術館	作品調査協力
4. ファーブル美術館	作品調査協力、資料調査協力
5. オルセー美術館	資料調査協力
6. フランス国立図書館	資料調査協力
7. 姫路市立美術館	作品調査協力
8. 東京都写真美術館	作品調査協力
9. ギャラリー・ミレー	作品調査協力

※主に教育機関や地域団体、他館などを中心に記載。表が不足する場合等は適宜増減すること

## 主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1.	
2.	
3.	
4.	
5.	

※学会発表や論文など、主なものを中心に記載。表が不足する場合等は適宜増減すること